慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	王実味と「王実味問題」とを語る
Sub Title	
Author	王凡西(Wang, Fanxi) 長堀, 祐造(Nagahori, Yuzo)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2010
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 中国研究 (The Hiyoshi review of Chinese studies). No.3 (2010.) ,p.65- 109
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA12310306-20100331-0065

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

王実味と「王実味問題」とを語る

王凡西著
長堀祐造訳

王実味その人、その事 ——訳者解説に代えて——

一九四二年早春、王実味は中共延安根拠地で「政治家・芸術家」、「野百合の花」など当地の中共幹部の特権や官僚主義を批判する一連の文章を書き、『谷雨』や『解放日報』「文芸副刊」などに発表した。折しも、延安では毛沢東によって王明ら留ソ派＝国際派の追い落としを真の狙いとする整風運動が発動されていた。毛沢東は延安の労農勢力の中にあった知識人に対する反感を利用し、その最たる象徴、留ソ派幹部を排除しようとしたのであるが、スターリンを後ろ盾とする彼らに直接矛先を向けることはできず、まず批判可能な知識分子をスケープゴートとしなければならなかった[1]。こうして王実味の中共指導部批判は毛沢東による整風運動の恰好の標的となったのである。毛沢東は当時、王実味の意見が載った延安中央研究院前の壁新聞『矢与的』を読み、「思想闘争に標的ができた」と言ったという[2]。毛沢東はこの王実味批判の合唱の中でかの有名な「文芸講話」を行ったのである。王実味は「ト

ロッキスト」「国民党のスパイ」「反党五人組[3]」というレッテルを張られ、徹底した批判対象となって一年後に逮捕、以後四年間にわたり拘束状態に置かれた。一九三〇年代初めの江西根拠地で自身が領導したAB団粛清運動が富田事変[4]を誘発するという苦い経験を総括した毛沢東は「不要放也不要殺（釈放するのも殺すのもだめだ）」という指示をしていたにも関わらず、王実味は国共内戦期の一九四七年、国民党の延安侵攻から逃走する中共部隊に従って晋綏根拠地に護送される途中、斬首刑に処せられたのである。王実味事件は、文革期にまで及ぶ毛沢東統治下の徹底した知識人に対する弾圧・粛清政策の最初の事例であった。作家劉賓雁は六・四事件後に亡命したアメリカでこう書いた。

「毛沢東はいかなる地のいかなる共産主義の指導者よりも効率的に知識人を支配した。まず毛は知識人の自立的地位をうち砕き、ついでその批判精神を巧妙に根絶してしまった。文革時代、四人組は毎年五月二四日、「延安における文芸講話」発表を記念する壮麗な儀式をとり行った。毛の全著作の中で何故この作品だけが特別な扱いを受けたのであろうか。それは、この講演で毛が知識人に対して最大限の打撃を与え、その自立と批判精神とに死刑判決を言い渡したからである。ちょうどその時、「野百合の花」も攻撃対象となり、王実味の悲劇が現前化し始めた。一九四二年から一九五六年の間、共産主義者の統制下にある、文学、ジャーナリズム、哲学、社会科学あるいは他のいかなる形式の社会活動であれ、あらゆる領域で批判を行うことは不可能であった。ただ現状を支持し、賞賛することができるのみであった。一九五六年と一九五七年のほんの短期間、独立した思考が回復したが、その後中国は再び何年もの間沈黙した。他の共産主義国では、ほんの一言で異端者扱いされ、何十年もの権利停止や死刑判決まで宣告されるなどということはほとんどなかった。ところが中国で

はそうしたことが数百万の人々の運命だったのである。中共の言論に対する恐怖心はある種の強迫観念となった」と。[5]

本稿の著者、王凡西もまたこの延安整風の中でも重要な意味を持つ「文芸講話」と王実味事件について、別稿でこう位置付けている。

「毛沢東の「講話」は一九四二年五月に発表されたが、これは同年三月に王実味が発表した「野百合の花」に触発されたものである。「野百合の花」事件は中共の文芸戦線にあっては重要な戦役であり、その意義は王実味のあの数編の雑文そのものの意義を遠く凌駕している。作者王実味という人物は、後の胡風同様、その重要性は本人自身にあるのではなく、本人を含む人びとが代表する傾向にあり、また彼らが意識的あるいは無意識的に代表するセクトにあった。「野百合の花」の数編の雑文そのものについて言えば、それほどたいそうな深い意味を持っているわけではないのに、あのような大騒動を引きおこして中共統治下の最初の文学大獄となり、毛沢東自身が前面に出て介入し、自ら座談会を指導せざるを得なかった主たる理由は、それが魯迅の傾向を代表していたからということにつきる[6]」

「一九四二年春の「野百合の花」事件とそれに続いて発表された「文芸座談会講話」[「文芸講話」のこと―長堀注、以下同]の主たる意義は以下の如く見るべきである。

王実味は北京大学の学生で、胡風の同級生であり、魯迅の崇拝者だった。こうした人物によって中共と魯迅との間の闘争が引きおこされたことは、大きな象徴的意義がある。「野百合の花」を構成する数編の雑文は実

際のところ、「事件」を引きおこすようなものではなく、それが捉えられて正面から痛撃を食らったのは、ひとえに魯迅の作風を代表していたがためである。

だから、毛沢東が登場するや、「講話」の中で王実味だの「野百合の花」だのはもう持ち出されることはなく、いっそのこととばかり魯迅本人と魯迅精神とを攻撃したのである。講話の中で、毛沢東は当時の延安に存在したいくつかの「曖昧な考え」を列挙した。それらは以下の通りである［「文芸講話」の「結論」の「四」にある］。

「人間性論」

「文芸の基本的出発点は愛であり、人類愛である」

「これまでの文芸作品はみな光明と暗黒を同じ比重、つまり半々に描いてきた」

「これまでの文芸の任務はほかでもなく暴露にあった」

「まだ雑文の時代であり、魯迅の筆法が必要だ」[7]

「私は功績や徳行を賛美しない。光明を賛美する者はその作品が偉大とは限らないし、暗黒を描き出す者はその作品が矮小とは限らない」

「立場の問題ではない。立場は正しく、意図もよく、理屈もわかっているが、うまく表現できなかったかばかりに、悪い役割を果たす結果になった」

「マルクス主義の学習を提唱することは、弁証法的唯物論の創作方法の誤まりをくりかえすことであり、それは創作の気分をそこねる」

上述八種の「曖昧な考え」をまとめるならば、その核心は実のところただ一点にすぎない。内容的には暗黒面の批判を許さず、功績と徳行を賛美すべきである、筆法は冷やかな嘲笑と辛辣な諷刺を許さず、熱く賛美すべきである、と。毛沢東は「雑文時代」の魯迅はすでに過去のものとなり、魯迅の筆法は捨て去らなければならないと宣言したのである。もちろん、毛沢東の講話はこうも単純明快に言ってはいない。一部の批判、例えば、人間性論と人類愛に関する数段落は、はなはだ対症療法的である。同時に明らかに魯迅に関わる段落では毀誉褒貶のバランスが非常にいい。捨て去ると言っても限度が保たれている。しかし、もし文字面にとらわれず、その背後の精神と講話が発表された当時の中共全体の政治情況とに着目すれば、毛沢東の延安文芸座談会における講話の主たる意図がはっきりと見えてくるのである。それはすでに中国新文学運動の中で主流となっていた批判暴露の精神を阻止することであり、講話の主要打撃が魯迅とその弟子たちに向いていたことがわかるのである。一九四二年、すなわち講話が発表された当時の中共の政治情況はどのような特徴があっただろうか（原注：王明系統の中共内での最終的敗北は一九四一年一月の新四軍事件をメルクマールとしても差し支えない。というのは、王明らは項英らを籠絡して自分たちの党内での復活のための元手にしようとしたことがあるからである［項英は一九四一年一月の皖南事変（国民党軍による新四軍＝中共軍攻撃）で死亡］）。それは毛沢東の王明系統に対する闘争がすでに決定的な勝利をおさめ、毛沢東の地位はすでに確立したがその強化伸長が待たれ、そこで文芸方面の魯迅の伝統と魯迅精神を消滅する必要に迫られていたというものである。というのは、魯迅精神は反権威、反圧政、批判の重視、民主の提唱を根幹としており、指導者の神格化を象徴とする官僚強権制度確立にとって、最大の障害物だということがおのずと証明されるに違いないからであり、いかなる代価を支払ってでもこれを撲滅しなければならないこと理の当然であったからである[8]」と。

さて、本誌『中国研究』第一号掲載の王凡西著拙訳「魯迅の書信から陳其昌その人を語る」の解題及び注でも触れたのだが、王実味その人について、まず簡単に生涯を見通しておきたい。

王実味、原名思褘、字叔翰。訳者が二〇〇〇年に北京大学档案館で調査した『国立北京大学歴届同学録　1898－1947』（五十周年籌備委員会編、国立北京大学出版部、民国三十七年十二月）には「王思褘」という名前で登録されていた。一九〇六年、河南省潢川県生れ。一九二五年、北京大学預科入学。翌年、同郷の先輩、陳其昌[9]の紹介で中共入党。このころ、文学活動も開始し、徐志摩主編『晨報副刊』に小説「楊五奶奶」を発表している。しかし、本訳稿にもあるとおり、中共北京大学支部で同じく支部構成員の李芬[10]に恋をし、恋敵の支部書記によって批判を受け、中共党組織から離脱。一九二七年、経済的困難から北大を離れ、山東泰安で教員、のち南京で短期間、国民党党部の下層職員となるが、このことが後年、康生によって「国民党のスパイ」とされる根拠となった。この時期、同じく南京にいた北大の同窓生、張天翼（のちに魯迅に高く評価される作家となった）と親しく往来。一九三〇年、北大の同窓生で李芬の親友だった劉瑩と上海で結婚。このころ、中共北大支部時代の旧友でトロツキストに転じていた王凡西や陳其昌に再会、『トロツキー自伝』などの翻訳を手伝う。

この間、一九二八年十月十九日の『魯迅日記』には「史済行、徐挽瀾、王実味から手紙、午後返信。……王実味の小説稿を返送」とあり、王の北大在学時に講師として務めていたことのある魯迅との間に通信が確認できる。王凡西は王実味、陳其昌は北大時代に魯迅の崇拝者となっていたと証言している[11]。また、『馮雪峰文集』第三巻（人民文学出版社、一九八三年）には一九三〇年六月発表の「答王実味先生（王実味さんに答える）」という短文が収録されている。それによれば、王実味は馮雪峰が『新地月刊』に訳載したソ連に関する文章の誤訳を指摘し、あわ

せてトロツキー派的観点から陳独秀を擁護する内容を記した手紙を馮雪峰に送ったことがあるようだ。馮雪峰はこれに反論する短文をしたため、同誌に掲載したわけである。馮雪峰も王実味と同時期、友人潘漠華の聴講証で北大で聴講していた。王・馮の二人は北大当時は知り合いではなかったと王凡西は証言しているが、王凡西は馮雪峰とは同郷でもあり知り合いであった。このころまでに何らかの接点が王・馮の間に存在したのかもしれない。[12] さらに、王実味は一九三二年には、胡適との間で訳稿寄稿に関するやり取りがあり、時間を溯るが北大時代には同級生胡風とも交流があったことが確認できる。[13]

王実味はその後、一九三六年、開封で中共に再入党。翌年十月、二人の幼子を妻に託し、范文瀾の紹介で単身延安に入る。これが家族との永遠の別れとなる。延安ではマルクス・レーニン学院編訳室（のち、中央研究院に改名）でマルクス、レーニン著作の翻訳に従事（訳者が二〇〇〇年に北京清華大学で見た延安期に出た解放社版（中国語）『レーニン全集』には確かに王実味の名が訳者としてあった）、中央研究院中国文芸研究室の特別研究員となった。一九四二年三月、「野百合の花」「政治家・芸術家」を発表、整風対象となり、翌年四月逮捕。一九四六年、最終的に「反革命トロツキー派スパイ分子」とされる。一九四七年三月、国民党の延安攻撃を逃れ、晋綏根拠地へ護送される途中、心身ともに不調をきたし、お荷物となった王実味は中共中央社会部の批准を経て山西省興県で斬首刑を執行された。[14] 翌年このことを知った毛沢東は、怒り心頭に発し、康生の後を継いだ当時の中共中央社会部長李克農に「王実味を弁償してかえせ」と詰め寄り、その後も一再ならず会議の席上、批判を繰り返したという。[15]

さて、文革後になってはじめて、王実味処刑の消息を知った未亡人劉瑩ら家族による名誉回復請求に対し、その死までこれに取り組んだのは延安当時、中央研究院の副院長で、いわば王実味の批判対象だった李維漢［別名羅邁］である。李らの努力によって、一九八四年までには「国民党特務」や「反党五人組」というレッテルははずさ

れることとなったが、名誉回復の最後の難関「トロツキー派」の帽子は、王凡西が『双山回想録』[16]で王実味をトロツキストとしていたため、はずすのが困難となっていた。そこで、書かれたのが本稿である。王凡西は、王実味にトロツキスト組織参加の事実はなく、中共再入党後はトロツキストの友人たちと関係を絶ったことを証言し、これを受け、中共は一九九一年、王実味の完全名誉回復の決定をおこなった。王実味の家族にとって、王実味の名誉回復は生活の問題とも直結していた。自身も上海に家族を残して英国で亡命生活を送る王凡西は当然そのあたりの事情は知悉していた。いずれかの段階で王凡西と王実味家族の間で間接的な連絡ができていたのかもしれない（本稿を読む限りその可能性は高くはないが）。いずれにせよ、この文章はある意味で、中共開明派と王凡西との間の「阿吽の呼吸」で発表されたとみることもできよう。しかし、そのことによって王凡西の文章が曲筆に陥ることはなく、通例のごとく真率そのものである。旧友王実味に対する懐旧の念、残された「政治犯」の家族を思いやる気持ちがひしひしと読者に伝わってくるだろう。

なお、李維漢はトロツキスト鄭超麟に建国前夜に中共への復帰を打診した人物でもある。[17]王凡西は一九七九年に自由を回復した鄭超麟と通信が復活していたが、そうした背景もこの問題に何らかの影響を及ぼしているようにも思えるがこれはあくまで憶測の域を出ない。

本稿のテクストは著者生前に訳者に送られてきた、香港の雑誌『九十年代月刊』一九八五年五月号掲載の文章コピーに著者王凡西氏自身が訂正加筆したものである。

注記した以外で本解説に使用した主要参考文献には以下のようなものがある。

（1）温済沢等著『王実味冤案平反紀実』（群衆出版社、一九九三年）。

（2）黄昌勇編『王実味　野百合花』（中国青年出版社、一九九九年）。本書は、王凡西、劉瑩両人にも取材した周到な伝記である。王凡西、劉瑩の証言の食い違いなども本書で確認できる。

（3）姜振昌編『民国雑文大系　野百合花―四十年代延安解放区雑文選』（文化芸術出版社、一九九六年）。

（4）清水美和署名記事「スパイ容疑で処刑の作家49年ぶりに名誉回復」（東京新聞、一九九二年二月二三日付）。これは『羊城晩報』が一九九二年一月三一日、二月七日、二月十一日の三度にわたって連載した温済沢著「王実味冤案平反紀実」（原載は『炎黄春秋』誌。前掲参考文献（1）に収録）による記事。

なお、「野百合の花」の日本語訳には以下のものがある。

1．竹内良雄訳「野百合の花」（『現代中国文学』第十二巻、竹内実編集・解説『評論・散文巻』河出書房、一九七一年、所収）。

2．丸山昇訳「野百合の花」（西順蔵編『原典中国近代思想史』第五冊『毛沢東思想の形成と発展』岩波書店、一九七六年、所収）。

私たち日吉の同僚、竹内良雄氏（経済学部・中国語）は一年後の二〇一一年春に定年退休予定である。いささか早いが本稿をもって餞としたい。

解説注

（1）李洪林著『中国思想運動史　一九四九－一九八九』香港天地図書出版公司、一九九九年、十八～十九頁。

（2）前掲、李洪林著十七頁。但し、このおおもとの出典は李維漢著『回憶与研究』下巻、中共党史資料出版社、一九八

六年、四八三頁のはずである。また本訳稿（五）も参照のこと。

（3）他の四人は成全・王里夫妻と潘芳（資料によっては潘方とする）・宗錚夫妻。延安で王実味と近所付き合いがあったことでトロツキー派活動を行ったとされた。

（4）本誌『中国研究』第二号、二〇〇九年三月、掲載の拙稿『魯迅と富田事変（初稿）――江西根拠地におけるＡＢ団粛清と毛沢東――』参照。

（5）Liu Binyan “Foreword” to *Wild Lily and Prairie Fire*, Ed.by G.Benton & A.Hunter, Princeton Univ. Press, 1995 原文は英語。ここでは英語からの拙訳。

（6）王凡西著『毛沢東思想論稿』、一九七三年香港信達出版社、二七一頁。二〇〇三年香港新苗出版社・台湾連結雑誌社版では二五九頁。

（7）王凡西のここでの引用は不正確である。「還是雑文時代，還是魯迅筆法」とするが、後半部は「還要魯迅筆法」が正しい。毛沢東が魯迅の筆法を廃棄しようとしているという王凡西の見方がこれによって影響を受けるわけではない。また、本文次行及び次々行にある「作品」という語も、王凡西の引用では「作用」となっているが、これも誤りである。ここではともに『毛沢東選集』第二版、第三巻所収の「文芸講話」のテクストにしたがって訳出した。

（8）王凡西著『毛沢東思想論稿』、香港信達出版社版、二七四～二七五頁、香港新苗出版社・台湾連結雑誌社版、二六二～二六四頁。

（9）別名陳仲山、陳清晨など。後に魯迅著とされた「トロツキー派に答える手紙」のきっかけを作る手紙を魯迅に送ったトロツキスト。本誌第一号掲載王凡西著拙訳「魯迅の書信から陳其昌その人を語る」参照。

（10）「野百合の花」参照、また前掲拙訳稿参照。

（11）本訳稿及び前掲本誌第一号掲載拙訳稿参照。

（12）拙稿「「トロツキー派に答える手紙」をめぐる諸問題（続）」（『蘆田孝昭教授退休記念論文集　二三十年代中国と東西文芸』（東方書店、一九九八年）参照。

(13) 朱鴻召編選『王実味文存』(上海三聯書店、一九九八年)所載朱鴻召著「王実味年譜」、黄昌勇著『王実味伝』(河南人民出版社、二〇〇〇年)などによる。なお、胡風夫人梅志著『胡風伝』(北京十月文芸出版社、一九九八年、一三五頁)には以下のような記述がある。「[胡風は]北大預科二年生の時、第一院の前の庭を散歩していて、数人の同級生と知り合いになった。その中に王四維(後の王実味)という学生がいた。いつも散歩のときには英語の本を手に持っていた。あとで、王は英語が得意で、勉強熱心なことを知ったが、王は人づきあいが苦手でいつもひとり憂い顔で散歩していた。王は非常なはにかみやで友たちづきあいはへただった。光人[胡風]と話すときだけは、自分の苦悶の胸の内をもらした。光人は王とは一、二度話したことがあっただけで、友人にはなれなかった」と。胡風夫人にはトロツキストとして断罪された王実味に触れる際、無意識のうちにも抑制が働いていただろうから、引用最後の一文はいささか割り引いて考えるべきであろう。なお、この記載については文学部(日吉)の同僚で胡風研究の専門家、関根謙氏からご教示頂いた。

(14) 横澤泰夫著「王実味の名誉回復」(『熊本学園大学　文学・言語論集』第二巻第一号、一九九五年)によれば、この処刑の責任者を賀竜とする者(戴晴、楊中美)と、康生とする者(凌雲)がいる。李洪林は凌雲の回想録により、康生責任者説をとる。なおそれぞれの出典は戴晴著『我的入獄』(後掲注15参照)、楊中美著『遵義会議与延安整風』(香港奔馬出版社、一九八九年)、凌雲著「王実味的最後五十個月」(解説本文に掲げた主要参考文献(1)に収録)。また一部資料は王実味が銃殺刑に処されたとするがこれは誤り。

(15) 「王実味と『野百合の花』」、戴晴著田畑佐和子訳『毛沢東と中国知識人』(東方書店一九九〇年)所収、八二頁。本書の原著は戴晴著『我的入獄』所収の「王実味与『野百合花』」(明報出版社、一九九〇年)。なお、本訳稿(四)も参照のこと。

(16) 香港周紀行出版社初版、一九七七年。増訂版は香港士林図書服務社、一九九四年。邦訳は矢吹晋訳『中国トロツキスト回想録』柘植書房、一九七九年。

(17) Editor's Introduction p.xvii, *An Oppositionist for Life: Memoirs of the Chinese revolutionary Zheng Chaolin*, Ed. &

Tr. by Gregor Benton. Humanities Press, New Jersey, 1997.

王実味は中共史上最初の文字大獄の被害者である。本文の著者は王実味の古い学友、同志にして友人の資格で王実味のために歴史を証言する（原載誌見出し）

近年中共党史を研究する中国内外の学者と中国の民主運動に関心を持つ人々はますます王実味に関心を持つようになってきている。これは容易に理解できることである。というのは王実味は中共史上最初の文字大獄の被害者であり、スターリン、毛沢東の文芸政策が中国において執行された際の最初の犠牲者であり、また中共党内において勇敢にも身を挺して高級幹部の特権に反対し、党内民主を求めた最初の知識分子だからである。

こうした立場のために、王実味は党内で重要な地位に就いたこともなく、遺著もわずか数編の雑文に過ぎないにも関わらず、中共の思想的展開と党制確立の歴史の上で間違いなく重要な役回りを演じたのである。王実味が象徴するような思想と作風はもちろん、人々が注目、研究するに値するものである。

しかし、私が今王実味に興味を持ち、ここで彼の往時の数々を語ろうとするのは、極めてとは言わないまでもかなり限られた目的のためである。私は王実味の古い学友、同志、友人の資格で、王実味と私個人及び中国トロツキー派との関係を事実をもって説明しようと思う。

こうした関係が、王実味の名誉回復の鍵となっているようだからである。

（一）

王実味、原名は思袴、実味は『現代評論』に投稿した際に使い始めた筆名で、その後あっさりこの名に改めてしまった。河南人である。王と私とは一九二五年秋、北京大学に入り、文科預科一年に編入され、さらに小人数のクラス（一クラス二十数名でその中には後に「胡風」の名で有名となる張光人もいた）で同級となって授業を受けたので生活上かなり近しかった。文学、とりわけ西洋の文学に関して、王と私とは興味が一致した。私たちはともに当時の北京の文学的雰囲気に影響を受け、各種の新聞雑誌に進んで投稿した。三・一八惨案[1]前後、私たちはともにボヘミアンの小文人から革命的共産主義者となった。こうした趣味と思想発展上の共通点のせいで、私たちは自ずとかなり親しい友人となった。

私は一九二五年の冬、中国共産党に入党した。王実味の入党は多分私の数ヶ月後だったろう。王実味の入党の紹介者は陳其昌[2]だったと記憶しているが、二人は同郷だった。其昌は私より入党が早く、当時はもう北京大学党支部の幹事の一人だった。

党員になると、私たちはともに切迫した革命工作に忙殺され、個人的な交流はかえって少なくなり、時には長いこと顔を会わせないこともあった。一九二六年春から一九二七年春に到る時期の王実味に関することで鮮明に記憶に残っているのは、王の恋愛事件だけである。この事件には王実味の性格が多少とも表れているし、またこの件は、後に延安で問題となった事件ともいささか関係がある。

当時の北京大学支部には二人の新入女性党員がいた。李芬と劉瑩である。二人は湖南出身で、ともに尊敬するに

足る愛すべき女性だった。李芬の方が少し大人で、工作能力も上だったようだ。それで、一般の学友はみな李芬に好感を持ち、王実味も彼女を愛してしまったのである。王実味は愛を伝えるために李芬に手紙を書いた。しかしもらった方にはその気はなかった。当時の北京の革命党人の間では、ピューリタン的な作風が支配的だった。同志の間での恋愛は、たとえ党紀に反しないとしても、少なくとも消極的行為と見なされ、ひいてはブルジョワ階級のロマンチックな行為と見なされることすらあった。李芬がこうした雰囲気に影響されていたかどうかは知らない［李芬は前夫と死別、子供があり再婚の意思がなかったという。解説参考文献（2）黄著参照］。ともかく彼女は王実味を相手にせず、返事も書かなかった。しかし、王実味はあきらめず、ますます必死になった。続けざまに李芬に五、六通の手紙を書いたという。そのため李芬は非常に不快になり、また不安を感じ、ついにこの件を組織に対して公にした。北京大学党支部書記段某は李芬同様湖南人で、また多くの人が言うところでは、段も李芬に気があったということだ。王実味のひたむきな片思いが段の手に処理が任されると、ことは針小棒大にされていった。これは一九二七年春のことで李大釗らは［張作霖軍にソ連大使館で］捕らえられてはいたがまだ殺害されてはいなかった。白色テロの嵐が北京を覆い、私たちの工作も非常な慎重さと秘密性を保持して行われていた。しかし、この書記は「王思禕事件」を解決しようとして北京の爛漫胡同の湖南会館に［中共］北京東城部委と北京大学支部幹事会の合同会議を招集した。出席者及び列席者は十数人の多きに上り、会議はほぼまる一日かかった。

五十八年の時を隔てた今、私は会議の詳細を思い出すことはできない。覚えているのはただ、かの段書記（ついでに言えば、この人物は約一年後には脱党し国民党に入党した。後に聞くところでは山東某県の県長になったそうである）が大げさに怒った表情で発言したことだけである。段は王実味の入党が李芬を追いかけるのに都合がいいからというだけのことで、革命に参加するためではなかったと強調した。また、この白色テロの極めて厳しく、党

の指導者たちが大難に遭い、闘争が非常に緊迫して困難な時に、党員たる王実味は悲憤を力に変え、行動を持って弾圧に答えようとしないばかりか、こともあろうに女性同志を必死に追いかけ、恥知らずなことをして不届き千万だと言った。段は王実味に厳重な党紀処分を行い、党籍は剥奪しないものの「留党観察」にするよう、会議が決定することを求めた。その他の参加者も皆発言した。皆は王実味を非難し、中でも陳其昌の批判がもっとも厳しかった。其昌は純然たる「兄貴」の立場でこの「弟」をしかり、こんな風に騒ぎ立てるべきでないと言った。しかし、一人として段書記の「動機不純論」を支持するものはなく、王実味を除名したり厳重警告にしたりするよう主張するものはいなかった。私の発言の大意は以下のようなものだった。男性同志が女性同志に恋をするのは誤りとは言えない、しかし一方が受け入れたくないのに一方が絶えずつきまとうのはよくない。ここでは、王実味がこれ以上手紙を書かないということに同意しさえすればことは収まる。主として個人に属する性質の事柄を党と革命のレベルにまで引き上げて考えようとは主張しない、と。段書記は私たちの「自由主義」的見方に大いに不満だったが、彼はたった一人の少数派であり、多数意見に従うほかなかった。結果は、王実味を正式に批判し、これ以上李芬に手紙を書かないことを求めた。

会議に列席した王実味は（李芬は来ていなかったと記憶する）終始一言も発言せず、皆の自分に対する批判を静かに聞いていた。会議が結論を出すと、王は受け入れを表明し、「事件」は結末を迎えた。「自己批判し徹底して罪を認める」というやり方は当時はもうソ連共産党内部でさえ実行されなくなっていた。

その晩、王実味は私の住まいにやってきたが、感情は激し、李芬を愛さずにはいられないが、自分を押さえることはできる、彼女にはもう手紙は書かないと言った。同時に、段書記の見解と作風には非常に憤慨し、この上ない不満を抱いていた。段の恋愛観は封建的で、この件を処理する態度は官僚的だと王実味は考えていた。

「事件」後ほどなく、私は王実味と離れることとなった。私は武漢に行き、王は北京に残ったからである。この後続いたのは革命の大敗北であった。全国の革命家たちは恐ろしい迫害を受けた。お互い困難な条件の下で闘争し、最低限の生活のためにすら苦労した。私と王実味とは互いに連絡もないまま数年がたち［著者は二七年夏から二年間、中共の派遣でモスクワに留学していた］、一九三〇年春になって初めてこのかつての級友と再び関係が戻ったのであった。当時私はすでにソ連共産党左派（すなわちトロツキー派）の政治的見解に賛成したために中共を除名されており、王実味はと言えば、党との連絡を失い、組織に戻る方法を探しているところだった。

（二）

私は除名された後、生活のためにプレハーノフの哲学パンフレット『観念論から唯物論へ』を翻訳し、上海滬浜書店から出版した。王実味はこの本を見かけるやすぐさま書店に手紙を出し、自分の住所を記した書信を私宛てに手渡すよう依頼した。

手紙を受け取ったその晩、私は王実味に会いに行った。王は華界［上海租界の中国側管理区］に近い、フランス租界菜市路[3]のある路地に住んでいた。路地は汚く、家も古く、王の住む屋根裏部屋は中でもひどいもので狭くもあった。家具もなくがらんとした四方の壁と、豆のようなともしびとに、部屋の主のわびしい暮らしぶりは明らかだった。

私は意外にも、王にすでに妻がいることを知った。しかもそれはほかでもなく、李芬の親友で北京大学党支部のもう一人の女性同志、劉瑩だった。彼女はちょうど産後で、ベッドに寝ていた。子供はといえば、生まれたとはい

え養うすべがなく、死んでしまったのであった。二人は私を壊れた古いトランク（これは壊れたベッドを除けば、唯一の家具だった）の上に座らせ、昔の学友三人で夕べの語らいを始めた。大動乱の三年間、離ればなれになってのちの語らいだけに、本当に「相対すれば夢寐（むび）の如し」[4]の味わいがあった。

私たちは自然と李芬のことを話題に上らせたが、多くは語らなかった。李芬はまだ湖南で難に遭う前か、あるいは殉難後［李芬の殉難は一九二八年七月］、王実味夫妻がそのことをまだ知らない時点でのことだった。というのは、記憶をたどってみると、李芬が壮烈な最期を遂げたのを知ったのはやはり王実味の「野百合の花」を読んでのことであったからである。王実味が当時もっとも関心を持っていたのは次の二点であった。第一に、早く、党内を二派に分かっている政治的見解の分岐をはっきり知りたいということ。第二に、目の前の絶体絶命に瀕したひどい生活をどう解決するかということであった。私は長いこと時間をかけてスターリン派とトロツキー派の中国革命に対する見解の違いを説明した。私は［中国］革命における過去の二つの路線について王に話し、二派の当面の情勢に対する異なる評価、とりわけ党中央の盲動路線の誤りとトロツキー派が革命的民主政治綱領をもって改めて革命的力量を団結させ、そのことによって再度新たな革命を目指すと主張している理由を話した。王実味は私の説明を聞いてイメージを持ったようだが、二派のどちらにも肩入れしなかった。王は自らその方面に対して注意が不十分なうえ知識が少なすぎるので、今後より研究につとめたいと言った。王はこのとき、自分と劉瑩とは党との関係が切れてしまい、今また隊列に戻ろうとしているところだと私に語った。しかし再び組織に参加する前に、王は党内二派の是非をはっきりと知り、それからどちらの派に加入を申請するか決めようとしたのである。

生活に関して言えば、王はちょうど徐志摩に援助を頼んでおり、ある大書店の仕事で翻訳をするかも知れないと言った。この件は私が一九五一年に書いた短文の中でかなり詳しく書いた。以下は関連部分である。

「ちょうどこのとき、徐志摩がある訳文叢書を編集していた。王実味と徐志摩とはもとからの知り合いではなかった。誰の紹介で知り合ったのかは知らないが、どうも自分から売り込んだようだった。ともかく王は徐志摩と面会の日を約束した。当日、王が時間通りに徐志摩の家に行くと、なぜかは忘れたが、徐志摩は約束をすっぽかしてしまったのだった。翌日、王実味はまた訪ねたが、今度は少し早く行きすぎてしまった。王は徐志摩が朝寝坊だとは知らなかったのだ。家に入るなり、女中が「若旦那様はまだ起きなさっていません」と言い、ちょっとお待ち下さいと言った。王実味は激怒し、きびすを返して徐志摩の家を後にした。帰宅するときっちりと手紙を書いてこの「若旦那」に悪罵を浴びせた。徐志摩は手紙を受け取ると自分に非があることを知り、すぐさま王実味の家を探し当て、きちんと謝罪した。最後には何とか話がまとまり、徐志摩が王実味に「援助」を頼み、ハーディーの『帰郷』を翻訳することになった[5]」

この一件は王実味という人物のおもしろさをよく表している。これは私と王実味夫妻が一晩長談義をしてから間もないことであった。

訳書の「公務」の話はまとまったが王実味には本を買う金もなかった。当時私も「その日暮らし[6]」の生活をしていたが、王実味と比べれば、私にはまだ上海にコネがあった。そこで私が何とか手を打ってトマス・ハーディーのその原書を彼に買ってやったのである。

（三）

王実味と私とは上海で、一九三〇年春から一九三一年春まで、まる一年ほどつきあいがあった。王は翻訳で、私は左翼反対派組織の仕事で忙しく、お互い顔を会わせるのは非常に少なく、十回にもならなかったと思う。王実味が私のほかに当時つきあっていた者には私の知るところでは陳其昌がいるだけである。陳其昌、すなわち延安整風の際、何度も名前が出てきた陳清晨（ついでに説明しておくと、この人物が後に魯迅に手紙を書いた陳仲山にほかならない）である。陳其昌も当時すでに反対派に賛成したため党を除名になっており陳独秀派に属していた。しかし王実味はトロツキー派に参加したことはなかった。私が属した「十月」派にも、陳其昌の属した「無産者」社にも参加したことはなかったのである。

政治的には王はトロツキー派の主張に同意する点がかなりあった。とりわけ当時の中国情勢に関する見方、すなわち文字通り革命的情勢にあるのかそれとも革命の事業はすでに敗北したのかという点について、王は反対派の見方が比較的正確であると考えた。[7] しかし王は反対派が新規巻き直しをはかり、新党を新たに作って革命を指導することができるのかどうかということには疑問をもっていた。王はみなが終始、党内にとどまること、たとえ除名されても別党を作ろうとはしないことを望んだ。王のこうした考えこそ、後に何とかして党に戻り、さらには延安に赴いた主な原因だと私は信じている。

しかし、こうした事柄は王が私と時たま会った際にする話の主題ではなかった。私たちが会う度に話し、話す度に論争となった問題は、後に王を有名にした「人間性論［原文は人性論］」であった。一般の政治と特殊な革命政

治とを問わず、人間性は大きな役割を演ずると、王実味は深く信じていた。王は、マルクス主義者は過度に客観を強調し、物質を重んずるため、客観的物質条件を変革すれば、人間性はすぐにでもよきものに変化可能だと思いこんでいる、と考えていた。王は必ずしもそうではないと考えていたのである。彼によれば、人間性改造という仕事は独立したもので、社会の物質的環境の改造より重要とは言えぬまでも、少なくとも同じくらい重要なものであり、それらは同時に行われなければならないというのである。王実味のこの理論にはしばしば大いなる感慨と不満とが伴われていた。革命が敗北し、勝利を得た新王朝の権力者たちが露わにした「人間性」はなんと北洋老軍閥のそれよりもさらに醜悪なもので、王はそのことに悲憤を感じた。さらに王が強く憎んだものはと言えば、少なからぬ「旧友たち」が、情況が変わるのを見て取るや、たちまち転向して敵を味方と見なし、友を売って栄達を求めるのを目にしたためであった。この「骨のない恥知らずな輩」について語るたびに王は決まって感情が激してこう聞くのであった。「もしこの革命が失敗せず成功していたなら、やつらも新政権の指導者や幹部になっていたんじゃないか。そんな役人がいたんじゃ革命政府に最良の制度があったとしても変質堕落するんじゃないか」と。

王実味のこの「社会を改革するには人間性を改革する必要がある」という論には、私も最初はまじめに論争を挑んだものだ。私は、マルクス主義者も人の個性はそれぞれだということを否定してはいないし、各人の性格には良いところもあれば悪いところもあると認めている、革命党は革命家に対する教育を軽視してはいないし、各党員の品格に注意を怠ってはいない、と言った。私はさらにマルクス主義の客観と主観との関係についてのかなり抽象的かつ根本的ないくつかの原理を語った。しかしこうした言葉はまったくの無駄骨だった。私が語るまでもなく、王自身とっくにこんなことは知っていたのである。こうした事実と道理を知り理解したうえでなお、王はこの「人間性」に関する見解を持ち続けたのである。そのため、私はその後の王とのおしゃべりの中では、もう真面目にこの

ことで論争しはしなかった。実際彼自身も、この見解を全面的に展開したり、さらには実行にうつしたりはしなかった。もし本当にその理論を貫徹するなら、王は仕事を換えて牧師になるか、少なくとも最後まで教師稼業を続けるべきであり、それ以上革命をやるべきではなかったのである。しかし王は死ぬまで革命家であった。

当時私はちょうど数人の友人と誘い合ってトロツキーの『自伝』を翻訳していた。王実味は英語力があったので、ちょっと手伝ってくれと頼むと引き受けてくれ、「ニューヨーク」と「強制収容所」の二章を訳してくれた。このことは、後の延安の文書によれば、王実味自らが党組織に報告していたことであった。また王はトロツキー派のためにレーニンの遺言を翻訳したことがあるとも言っているが、私はその件については知らなかった。陳其昌の関係で王独清が編集していた合法雑誌[8]に発表したのかも知れない。

王実味と私及びトロツキー派との交友は私の知る限り、これがすべてである。一九三一年五月、私が国民党に逮捕されると、私と王との交流は最終的に絶たれた。一九三二年春、すでに判決が下された私は上海漕河涇監獄[9]に繋がれていた。ある日の午後、看守が一包みの食べ物と二冊の本を私に手渡して言った。面会者が来たが接見許可が下りなかったので、これをあんたに置いていったと。二冊の本は英語で、一冊はとりもなおさず私が王実味に買ってやった『帰郷』で、もう一冊はフランスのフローベールの名著『サランボー』だった。この本から私はやって来た面会者が誰なのか察しがついた。王はそのときすでに翻訳を終えていたので、獄中での憂さ晴らしにと旧友のためにわざわざ持ってきてくれたのである。

これ以後、抗日戦争勝利まで私は王実味の消息を聞くことはなかった。それを知ったのは、趙超構の書いた『延安一月』[10]からであった。

（四）

新民報の記者趙超構が書いた『延安一月』のおかげで、私は久しく音沙汰のなかったこの旧友の消息を知ることができた。なんと彼は延安に赴き、そこでとんだ災難に巻き込まれてしまっていたのである。「蒼ざめた表情の青年が丁玲に付き添われて出てくると、本を暗唱するように記者たちを前に自分を罵った」。なぜなのか。「反党」文章「野百合の花」を書いたがためだ。

王実味がいつ延安に行ったのか、私は今でも調べがつかない。私が見た関係文書から推測すると、王は多分抗日戦争開始後に、それも北京、上海陥落後、全国の多くの知識青年が延安に赴いた際に陝北に入ったのであろう［王実味が延安に赴いたのは一九三七年十月のこと。解説参照］。彼がいつ上海を離れたのか、私にはわからない。一九三四年冬、私が釈放されて上海に戻ると王はすでに上海にはいなかった。陳其昌は、私が獄中にいる間の王実味の生活について語ったことがあった。しかしずっと私の記憶に残っているのは次のことだけである。王実味と劉瑩は二人目の子供、女の子をもうけた。この子が生まれたときも、二人は赤貧洗うが如しであった。そのとき、おりよく陳其昌が家中の質草になるものを全部質屋に入れて、大洋[11]二十元を手にし、二人の急場しのぎに持っていったのであった。それで幼い生命が守られたのである。当時すでに李芬は湖南で難に遭っており、二人にとって忘れがたい親友を記念するべく、この子は「念芬」と名付けられた。

王実味夫妻が上海を離れて延安に行くまで二、三年の間、王実味が一体どこで何の仕事をしていたのか、私が覚えているのは、陳其昌が王実味は山東に行って教師をしていると言うのを聞いたことだけである。王実味と陳其昌

の間の関係もこの時には絶たれていた。というのは、一九三五年から一九三六年の間、私はずっと上海におり、陳其昌とはよく顔を合わせていたが、其昌がこの昔の学友の消息を語るのを聞いたことがなかったからだ。延安の整党文献の記録によると、「王実味は一九三六年までずっとトロツキー派分子陳清晨と連絡をとっていた」とあるが、もしこれが事実だとすれば、単にごく日常的な挨拶にすぎなかったろう。さもなければ私が知らないはずがない。

共産党が内戦に勝利すると、すべての機関が農村から都市に移り、中央も延安から最終的に北京に移転した。この時、「冠蓋京華に満つる」のに「この人」[12]だけは姿が見えなかった。私は、王実味は結局自己を「改造」できず、上部の信任を再び得ることはできなかったのだと推測した。しかし私はやはり、ある朝、中共の新聞紙上で彼の名をふと見られればと願っていた。私は彼が「ちょっとした官職」についていることを願ったのではなく、ただ紙上から彼がまだこの世にいることが証明されることを望んだにすぎない。しかし数年待ったものの無駄だった。私のこのささやかな希望も結局毛沢東が出てきて、砕かれてしまったのである。

一九六二年一月三十日、毛沢東は拡大中央工作者会議で演説し、最後に王実味を持ち出し、こう言ったのであった。

［「殺さないでおくべき者の例として」……さらに王実味がいる。彼は［党内に］潜伏した国民党のスパイで延安にいたころ、文章を一編書いたことがある。題は「野百合の花」で、革命を攻撃し、共産党を中傷した。後に逮捕して殺した。保安機関が行軍[13]中に、勝手に殺してしまったもので、中央の決定ではなかった。この件に関しては我々は一貫して批判し続けている。殺すべきではなかったのだ。王はスパイで文章を書いて我々を罵り、死んでも改めようとしなかった。それなら放っておけばよかったし、労働〔改造〕に行かせればよかっ

たのだ、殺したのはよくなかった。……」（一九六九年原文復刊『毛沢東思想万歳』第四二一頁）[14]

毛沢東が王実味のために発したこの「訃報」を聞いて、私はもちろん悲憤を感じた。真摯で、情熱あふれる、正直な文人にして、純真高潔な理想主義的革命家、中国共産主義の事業のためにほぼ二十年にわたって刻苦奮闘してきた老党員が、あろうことか忠告と批判の小文を党に提出したために「国民党のスパイ」という罪状を被せられ、処刑されてしまったのである。しかし私は驚きはしなかった。というのは、一九二〇年代末期から、スターリンと全世界のスターリン主義者の政治的思想的異端者に対する野蛮かつ荒唐無稽なやり方をすでに見慣れていたからである。

私はただ、より詳細かつ客観的な王実味事件に関する文献を見たいと待ち望んできた。

（五）

最近海外のある大学の図書館で中共が出している『党史通訊』（一九八四年第八期）を見た。その中に「王実味問題」の専論（著者は宋金寿）があった。この文章は私の長年の願いを満足させてくれるものであった。王実味が当時、延安でどのようにして災難に巻き込まれたのか、どのような意見を発表し、その結果どのような処分を受けたのか、またいつ、どのようにして殺されたのか、さらには中共の新指導者が王実味という人物に対していかなる態度をとっているのか、を教えてくれるものであった。

この文章が提供する材料に基づいて、私は海外の読者たち、とりわけ王実味その人とその思想に関心を持つ友人

たちに、この亡友に災難をもたらすこととなった当の見解をいささか紹介したい。同時に私は関係者になることを余儀なくされた証人の資格で、中国内でこの事件に対する審査の権利を有する人たちに私の要求と申し立てを提出したい。

まず王実味が結局のところ、どんな誤りを犯し、後にどのような罪を着せられたのか語ろう。

王実味の誤りは、当該文書では三つの大きな項目に概括されている。

一、「ブルジョワ階級の立場に立って革命と反革命の境界を混同した」

二、「青年の代表を自認して青年と党との関係悪化を扇動し、極端な自由主義と絶対平均主義の思想を鼓吹した」

三、「ブルジョワ階級の文芸観を主張し、宣揚した」

この三つの大きな誤りは主に一九四二年二月から三月にかけての時期に発表された四編（「政治家・芸術家」「野百合の花」「羅邁同志の整風工作検討総決起大会における発言に対する私の批判」「硬骨と軟骨」）の文章にあらわれている。

このうち私が読んだのは「野百合の花」だけである。その言葉と内容について、私が今覚えているのはほんのぼんやりとした印象にすぎない。その他の三編は「反面教材」として何らかの文献や新聞雑誌に再掲載されたことはないようである。とりわけ延安中央研究院の壁新聞『矢と的』に載った「硬骨と軟骨」と王実味が書いた他の数編の雑文は「今日では読む方法はなく」「延安『解放日報』に載った王実味に反駁する文章中の引用から一部読むことができるだけだ」そうだ（『甘粛師範大学報』一九八〇年四月号、杜哲文著「王実味の一文章の題名について」[15]）。

しかし、『党史通訊』の文章はこれらいくつかの誤りをかなり詳しく紹介している。その明らかに偏向した書きぶりの中からも私たちは王実味の本当の意見をいくらかは読みとることができる。「玉堂春［京劇の演目の一。玉

堂春はヒロインの名妓の名」をさえずり歌い、金蓮歩［美人の優雅な歩みの意］を舞い廻る」［解説注（14）の楊著は、玉堂春は当時、延安魯芸学院で上演されていた演目で、後半の句は同じく当時毎週土曜日に開かれていた、延安指導者たちのダンスパーティーを指すという］は「野百合の花」の中の有名な文句である。作者は当時延安にすでにできあがっていた「天下太平の気風」をこう形容することで「李芬烈士と抗日戦の前線の同志たちの犠牲」を際立たせようとしたのであった。作者はこれらの「暗黒」面を避けて語らないのではなく、さらけ出して皆に直させるべきだと考えた。しかし、多くの上級指導者は上級幹部の時宜にかなった行楽は当然で、せいぜい小さな欠点にすぎず、「取るに足らぬ」「どうということのないこと」で「天は落っこちてこない」と考えていた。これは王実味から見ると、非常に危険な官僚腐敗の端緒となるものであった。そこで大声で叫びをあげ、この「不正の風」を整頓しようとしたのである。

王実味のこうした態度の中から「極めて明白なブルジョワ階級の立場」を見いだすことは、私にはどうしてもできない。逆に、これはブルジョワ階級の立場に反対し、ブルジョワ階級が革命根拠地に腐食作用をもたらすことに反対しているのだと思う。

王実味は青年を挑発して絶対平均主義を鼓吹し、その証拠は「野百合の花」にも見えるというが、作者王実味はその文章でこう言っているのである。

「青年の尊ぶべきところは、彼らが純真で敏感で、情熱的で勇敢で生命のみずみずしい鋭利な力に満ちている点にある。他の者が感じ取れない暗黒を青年たちは先んじて感じ取り、他の者に見えない汚れを彼らは先んじて見つけ、他の者が言いたくない、言い出せないことを彼らは大胆に発言する。だから彼らの意見は少しば

かり多いが、これを「不平」だとは言えないのである。彼らの言葉はあるいは穏当を欠くかもしれないが、それは「わめき立てる」こととは違うのである。私たちはこうしたいわゆる「不平」と「わめき立て」と「不安」の現象から、それらが生まれ出る問題の本質を探し出さなければならない」と。

これがどうして「挑発」と言えるだろうか。古今内外のいかなる改革と進歩も、改革者の側の原動力について言えば、主要にはそれらは例外なく王実味が文中で言っているような青年たちのあの尊ぶべき徳性に帰するのである。ほかのことはいざ知らず、中共自身の歴史について言えば、かつて『新青年』が中国の一群の青年たちの「純真で敏感で、情熱的で勇敢で生命のみずみずしい鋭利な力」を「挑発」せず、彼らに立ち上がって「大声で叫びをあげ」て、旧中国の「暗黒」と「汚れ」に反対するよう「挑発」しなかったなら、中国共産党はどこから生まれたであろうか。中国革命はどこから来たのであろうか。延安当局者がこのとき、こうした王実味の「挑発」に反対し、これを弾圧しようとしたのは、割拠地域内で十数年にわたって執政党となっていた中共がこの時すでに色濃い官僚主義に染まっており、革命的な若々しさを部分的に失っていたことを証明する以外のなにものでもない。

いわゆる「絶対的平均主義を鼓吹した」というのは「野百合の花」の以下の部分を指している。

「服は三種類に分かれ、食べ物は五段階に分かれているのは、実際必要とも合理性があるとも思われない。—とりわけ衣服の問題では［中略］すべては合理性と必要の原則に基づいて、解決すべきである。もし、一方で病気の同志が一口のうどんのゆで汁すら飲めず、青年学生たちが日に二度の粥しか食べられぬのに、［中略］他方では極めて健康な「大人物」が不要かつ不合理な「享受」にあずかっていて、そのことで下の者が上

の者に対して自分たちとは違う人間だと感じ、彼らに愛を感じないばかりか、そのうえ—これは人に些か「不安」を感じさせないわけにはいかない。ややもすれば他人に対してはプチブル平均主義だというが、自分の方は特殊主義なのである。ことはすべて自分を特殊化するばかりで下部の同志に対しては身体が良かろうが悪かろうが病気であろうが死のうがほとんど関心がないのである[16]」

王実味はここではっきりと「すべては合理性と必要の原則に基づいて解決すべきである」と言っている。彼は明らかに衣食その他の待遇も含め、一律平等、一律平均を主張したことはなかったのである。各人平等、物資平均を情況の如何に関わらず主張することは、言うまでもなく現実にそぐわない幻想である。無理にこうした主張をして実行すれば客観的には反動的役割をはたす。だからマルクス主義者はこうしたプチブル平均主義には反対なのである。しかしこれはマルクス主義者が等級分化を主張し、一部の人の特別の享受と他の人々の無権利の苦しみを鼓吹すると言うことでは決してない。マルクス主義者は時々刻々、「必要と合理性」の原則の下、特権をなくし、各人が徐々に平等になっていき、様々な享受が平均化していくようにしなければならない。

中共の一部の（私はすべての、とは言いたくない）指導者は「プチブル平均主義」反対の建て前に隠れて、悠々と「特権」生活を送っていはしないか。「文革」と「反四人組」の二次にわたる闘争の中での大量の暴露によって、私は王実味には本当に「先見の明」があったと言うほかない。人が敢えて言い出し得ないことを言った彼の何ものをも恐れぬ精神に、私たちは感服するほかないのである。

王実味に貼られた三つ目のレッテルは「ブルジョワ階級の文芸観を主張し宣揚した」ということである。これについては宋金寿の文章の中に以下のような引用を含む記述がある。

「文芸思想の上で王実味は文芸工作と革命工作全体との関係を分裂させ、文芸工作の任務はほかでもなく「暗黒の暴露」であると鼓吹した。「政治家・芸術家」の一文中、王実味は芸術家と政治家とを対立させ、芸術家に政治家の精神の「暗黒」を「暴露」させようとした。王実味はすべての文芸工作者に文芸を我々自身の弱点を「暴露する」手段とさせようとしてこう言った。「大胆にしかし的確にすべての汚濁と暗黒を暴き、それらを洗い流すことは、光明の側面を歌い上げることと同様、ひいてはより一層重要である」と。さらに文章の最後で王実味は、芸術家に呼びかける。「謹んで真摯な真心と熱望をもって芸術家同志たちにささやかな呼びかけをする。魂の改造という偉大な任務をより一層立派に担おう。まずは我々自身と我々の陣営に照準をあてて工作しよう」」と。

ここで一再ならず引かれる王実味の文章が改竄されているかどうかはわからない［この部分、宋の引用と現在通行している王実味のテクストとを校勘する限り改竄はない］。しかしたとえ、一字一句間違いないとしても「政治家・芸術家」の作者の立場が「ブルジョワ的」で「文芸工作と革命工作全体との関係を分裂させ」ているとは私には読みとれない。この三十年来の中共の文芸政策とそれがもたらした結果からして、とりわけいわゆる「文化大革命」中、文芸がいかに損害を被り、一般の文化人と一般ならざる一部芸術家がいかに蹂躙されてきたかをこれでもかとばかり目にしてきた私たちには、王実味が確かに時宜にかなった警告を発し、またそれが正確で透徹した見解であったと言えるだけである。「十年の大災難」［文化大革命を指す］を経た今日でもまだなお、文芸工作者は「歌徳［光明を讃える］派」でなければならないとか、党の指導者のために短所を庇い長所をほめなければならないと

か、「不正の風」は暴いてはならず、「自己の陣営」を批判してはならない、さもなければ「敵と見方を区別しない」「誤った立場」であるなどと言う者がいる。これはなんとも驚くべきことである。

王実味が一九四二年春に書いたこれら数編の雑文の中から見て取れる思想と感情は、三十四年後、すなわち一九七六年四月五日、北京の十万の大衆が天安門広場で詩歌によって表した抗議［いわゆる第一次天安門事件を指す］よりも激烈というわけではなかったが、より系統的で深いものであった。

さらに興味深いことに、宋の文章は私たちに初めて、王実味のこれらの数編の文章が延安で引き起こした大きな影響について教えてくれた。曰く、

> 『矢と的』（思うにこれは延安中央研究院の壁新聞であろう—王凡西注）は（一九四二年）三月二十三日に正式に出版された。壁新聞発刊の辞の中には「民主の矢で邪風を射る」という言葉があり、さらに壁新聞は「徹底民主」「絶対民主」を主張すると提起し、また「民主を阻む者はみな民主の前に血を流すであろう」とあった。こうした趣旨の下で壁新聞は王実味の一連の文章を連載したほか多くの極端な自由主義と絶対平均主義を鼓吹する［文章］があった……壁新聞『矢と的』出版後、これを読みに来る者が引きも切らなかった。数期の壁新聞が延安南門外に布に貼られて掛けられており、読む者は縁日に出向く人のように多かった。当時王震が『矢と的』を見に来て、その文章に大いに不満を示した。毛沢東はある晩『矢と的』を読みに来てこう言った。「思想闘争に標的ができた」と」（傍点は原著にはない—王凡西）

上段の言葉の中には明らかに壁新聞の原著の言葉を故意に歪曲したり、捏造したりした部分がある。たとえばカ

ッコ内の「徹底民主」や「絶対民主」などはおよそ少しでも共産主義運動についての常識がある者なら、延安中央研究院の壁新聞に公式の主張として書かれるはずがないことは誰でも知っている。とはいうものの、この段の文章は、王実味のこれら数編の小文が当時いかに大騒動を引き起こし、大きな影響を与えたかということを、非常によく私たちに教えてくれる。またこれは毛沢東の有名な「文芸講話」と王実味の思想的反抗との間の密接な関係を具体的に教えてくれる。

延安南門外に貼られた壁新聞は形式上も内容上も、三十数年後の天安門前と西単（シータン）壁上［いわゆる「民主の壁」］の詩歌、文章と軌を一にし、相呼応しているのだ。

（六）

王実味が延安当局者にかくもひどく恨まれ、彼らをして死地に追いやらねば済まぬという気にさせたのはこうした文章のほかに、民主を戦い取ろうという行動に原因があった。この重要な方面に関しては、『党史通訊』に次のような記述がある。

「一九四二年三月十八日、中央研究院は全院大会を召集し、整風と検査工作を呼びかけた。副院長范文瀾は全同志に対し、三風[17]の整頓と本院の検査工作に関する活動報告を行った。席上、院の整風検査工作委員会の人選と壁新聞出版問題についての論争が起こった。院整風検査工作委員会人選問題では、院務委員会の決定は研究室主任以上の指導的同志が当然委員となり、同時に大衆の中から一部の同志を推薦して、ともに委員会を構

成するというものであった。ところが王実味はこう提起したのであった。院整風工作委員会の構成員は大衆の直接選挙によらなければならない。各研究室主任は、たとえ院長であれ、同様に選挙によってはじめて院整風検査工作委員会の構成員になれるのであり、そうして初めて整風検査工作を指導する資格が得られるのである、と。そこで院務委員会の決定と王実味の意見にそれぞれ賛成する同志の間で激しい論争となった。結果は、王実味の意見に賛成する者が多数を占めた。最終的には院整風検査工作委員会の構成員は直接選挙によることが決定され、選挙が行われた。壁新聞出版問題についての王実味の提案は投稿者の民主的権利を保障するためには実名でも匿名でもかまわないというものであった。一部の人は王実味の提案に反対し、整風検査工作は党中央と毛沢東の呼びかけであり、院の指導者の検査工作を助けるためにも公明正大であるべきで、匿名ではいけないと考えた。同じくこの問題も大論争となった。最終的には、匿名でもかまわないという見解が優勢となって、これは「民主」の勝利だと高らかに叫ぶ一部の同志もいた。」（傍点は王凡西）

私は王実味のこの闘争について宋金寿の記述によって初めて知った。レーニンの民主集中制は後のスターリンの官僚集中制と本質的に異なるがその最も重要な違いは前者にはまず下から上への選挙があってそれから上から下に対する集中があるのに対し、後者には上部の「指導」と任命があるだけで、大衆には絶対服従の義務のみが課され指導部を選択し、監督する権限はまったくなかった。ここには集中があるばかりで民主はなかった。匿名制、あるいは無記名投票や無記名の意見発表という極めて重要な民主的措置に至っては「陰謀」として絶対的に排斥されたのであった。

初期の中共には健全な民主制があった。後に再三にわたる「ボルシェヴィキ化」を経て、ついには王明、康生一

味が全面的「ソ連共産党モデル」を中共内に紹介し、応用した。一九四二年の延安では、王明は政治的には弱体であったが、王明を捨て、毛沢東についた康生の主導下、中共組織はとりわけ特務体制において、すでにその「ボルシェヴィキ化」の手術をまさに完成させようとしていたのである。

王実味のこの民主化闘争は、中共の党制度が徹底したスターリン主義化にむかう里程標であった。中共の思想と党制度変遷の歴史においてこれは重要な一頁なのである。人々はこの一頁を知って初めて、中共の全国的な勝利後の一連の「運動」、とりわけ知識分子を標的にした「改造」運動を十分理解できるのである。

（七）

王実味の「絶対民主」を求める反抗にねらいをつけ、延安の最高当局者はどう反撃したのか、『党史通訊』のこの文章には比較的詳細な記述がある。長くなるのでこれ以上逐一引用するのはやめ、ここでは大体の経過を以下のごとく摘録するにとどめる。

一、一九四二年三月三十一日、つまり王実味が「政治家・芸術家」を発表した一週間後に、毛沢東は延安『解放日報』改版座談会で、名指しはせずに王実味の誤りを批判した。

二、同年四月三日、中共中央宣伝部は「中央の決定及び毛沢東同志の三風整頓報告を延安で討論することについての決定」[『中共中央文件選集』第十三冊（中共中央党校出版社、一九九一年）参照]を行ったが、その目的は「王実味が率先して巻き起こした誤ったプチブル風を糺す」ことにあった。

三、四月六日、毛沢東は中共中央高級学習組で発言し「整風の発動段階において三つの問題が存在する」と指摘

した。毛沢東は言った。「王実味を批判し、一部知識青年の問題を解決するには、二方面の工作が必要である。一つは思想上の、二つは物質上の工作である」と。

四、同時に胡喬木は毛沢東の幾度にもわたる講話の精神に基づき、王実味を二度訪ねて話をし、さらに二通の手紙を書いて王実味が誤った立場を改めるよう希望した。

五、四月七日、中央宣伝部は中央研究院の責任ある地位の幹部と積極分子を集めて座談会を開いた。席上、王実味の体系的な誤りと、一部同志の「自然発生的偏向」とは区別すべきであるとの指摘があった。これ以後、中央研究院は王実味の思想批判を開始した。

六、同日、延安『解放日報』は中央研究院の斉粛の文章「『野百合の花』を読んでの感想」を発表した。これ以後、王実味に対する公開名指しの批判が始まったがまだなお同志の呼称が用いられていた。

七、五月二日から二十三日まで毛沢東と凱豊主催の「延安文芸座談会」が召集され、「王実味のブルジョワ階級の文芸観を批判し、王実味の思想に対する批判が新たな段階に高められた」。

八、同年「四月末か五月初め」、康生は中央社会部の会議の席上、「王実味の「野百合の花」が四月、香港の新聞紙上に発表された」と発言した。この時、康生はすでに王実味を敵と見なしていた。その後しばらくして康生はより具体的に王実味は「トロツキー派分子であり、同時に復興社[18]分子でもあり、スパイを兼務している」と述べた。

九、五月二十七日から、中央研究院は「党の民主と規律」座談会を開き、王実味の誤りの程度について討論した。一部の人々は味方陣営内の意見の相違にすぎないと考え、一部の人々は王実味は「組織上は同志ではあるが、思想上は敵となった」と考えた。

十、六月一日、座談会で王実味とトロツキー派との関係問題を持ち出す者がいて、会はこれ以後一変して、王実味を批判し攻撃するものとなった。

十一、六月四日、王実味は命令によって会議に出席した。人々の自分に対する「日頃、トロツキー派の言論を宣伝していた」との暴露や、提出される多くの質問に聞き入っていた。「王実味はトロツキー派王文元（王凡西）との関係や同志たちの自分に関する暴露を認めた」。

座談会は六月十一日まで開かれ、閉会した。中央研究院の党指導者は次のような結論を出した。「王実味の思想を支配しているのはトロツキー派分子の思想である」、「王実味はトロツキー派分子である」と。

十二、王実味がトロツキー派と認定されて以後、中央研究院の潘芳と宗錚および中央政治研究室で仕事をしていた成全と中央婦委を担当していた王里が連座した。七月から十月までこの五人は七十二日間の批判集会にかけられた。その結果、「五人組反党集団」とされた。

十三、十月、王実味は正式に党を除名された。

十四、一九四三年四月一日、康生は命令を発し、一夜の内に延安で二百人あまりの「スパイ」「漢奸」「裏切り者」「トロツキー派分子」を逮捕した。王実味も逮捕者の列に連なり、棗園後溝［棗園はもと地主の荘園。中共の延安進駐後、延園と改称。一九四三～一九四七年、中共中央書記処所在地。後溝は中共中央社会部の所在地］の西北公学［中央社会部創設の情報活動の幹部養成学校］に監禁された。

十五、一九四七年三月、「胡宗南の延安進攻の際、党中央と辺区各級機関および人員はすべて延安を離れた。王実味もこのとき、逮捕状態で延安を退去した。黄河を渡り、晋西北根拠地に着いて以後、党中央の批准を経ぬまま、中央社会部の数人の決定によって、命令が下され銃殺された[19]」。

（八）

私はここで『党史通訊』のこの文章の作者に本当に感謝したい。王実味が失敗をしでかし、批判され殺された詳細な情況を教えてくれたからである。さらに私が感動させられたのは、この文章によって中央の新たな指導者の王実味問題に対する見方を知りえたことである。

作者は「歴史資料を閲覧すると同時に王実味問題に関与したことのある一部の老同志に取材し、彼らの当時の認識と現在の王実味問題に関する基本的観点を理解し……そこから以下の要点を帰納した……」。

「一、王実味思想に対する批判はまったく当然で必要でもあった。王実味は重大な誤りを犯しプチブル階級、ブルジョワ階級の立場観点（その中にはブルジョワ階級の文芸思想も含まれる）という誤りばかりでなく、トロツキー派の思想も持っていた」

「二、『五人組反党集団』は存在しなかったので、名誉回復すべきである。事実、王実味以外の四人（成全、王里、潘芳と宗錚）はすでに一九八二年二月二日、中共中央組織部の決定によって正式に名誉回復され、処分を取り消されている。この四人は「文化大革命」中、迫害されてとっくに死んではいたが」

「三、王実味は結局のところトロツキー派分子であったのかどうか。多くの同志は、関係部門が改めて調査をすべきであり、もし冤罪であれば、死者といえども名誉回復すべきだと考えている」

「四、王実味を銃殺したのは誤りである。多くの同志はたとえ王実味がトロツキー派であったにしても、銃殺

すべきではなかったと考えている」

王実味の思想問題については前に略述した以外のことをさらに述べるつもりはない。王実味の民主や特権、文芸に対する見解は、少なくとも彼の数編の短文の中に残っている。それらが結局のところ「ブルジョワ階級の立場」を表しているか否か、今後心ある読者はその文章から自分で判断することができるであろう。

歴史はもっとも公平な裁判である。かなり長い時間を要するとしても。王実味問題について、一体、正しいのは誰だったのか。王実味だったのか、それとも彼を殺した一部の権力者であったのか。私は歴史が最終的に判決を言い渡してくれるものと信じている。実際、「十年の大災難」の痛ましい経験を経て、歴史はすでに私たちのために基本的な判決を宣告しているのである。

長文の最後に私はここで王実味とトロツキー派の関係についてもう少し語っておきたい。

中共の新指導者のトロツキー派乃至王実味に関する態度は明らかに毛沢東、康生とは大きな違いがある。とりわけ、口からでまかせのでたらめを言い散らした康生とは大違いである。毛沢東は王実味を「殺すべきではない」と言ったことがあるが、一方ではこの殺人の被害者を「潜伏した国民党のスパイ」だと決めつけもした。殺しておいて、勝手にいい加減な罪状を被せるというやり方を、現在の中共の指導者はすでに糺そうとしつつあると私は信じている。彼ら自身「文革」の中で苦痛を味わい、今ではまじめに中国を法治の軌道に乗せようとしているようだ。この点、私たちは当然擁護もするし、賛成でもある。中国トロツキー派、すなわち初期に中共から分裂した左派共産主義者は一九五二年十二月に全員逮捕され、一貫して反革命の罪状を被せられて、監獄に監禁されてきた。一九七九年六月、中共の新指導者は彼ら全員の釈放を決定した。この件はもちろん歓迎に値する。これは当局者が「混

乱を治め、正常化しよう」とし、「人治」を「法治」に取って代わらせようとしている証拠である。しかし現在に至るまで私の知る限りでは中共新指導者の国際トロツキー派と中国トロツキー派に関する評価は基本的にいまだスターリン—王明—康生の影響を受け、相変わらず、これらの人物が画定した枠の中にとどまっている。新指導者たちは六十年来の国際共産主義運動におけるスターリン派とトロツキー派の間の論争問題でどちらが正しく、どちらが誤っていたのかはっきりさせる決心もつかなければ、関心もない。またこの両派間の中国革命問題における是非を明らかにする決心も関心もない。今日これら指導者たちは明らかに康生がモスクワから持ち帰った中国トロツキー派に対する中傷を否定している。つまりもはや陳独秀や他のトロツキー派を「漢奸」「スパイ」「復興社分子」などとは言わなくなった。しかしいまだ中国トロツキー派を革命陣営内の一派として扱おうとはせず、政治上の「復権」をしようとも、しかるべき名誉回復を行おうともしていない。これは歴史的に見て公正と言えないばかりか、現実の政治から見ても大いに有害である。というのは、私たちは社会主義建設の一点についてのみ言うならば、ソ連共産党のかつての左派反対派の政治綱領（最初スターリンの極端な右傾に反対し、後にはスターリンの「極左」冒険主義に反対した）は今日の中国が直面する問題に対してはこの上なく参考となるからである。

中共の新指導者がまじめに「中国の特色ある社会主義建設の道」を探ろうとするなら、一九二〇年代中期、後期及び一九三〇年代初期にソ連共産党内に現れた各派の社会主義建設に関する異なる見解（おもにトロツキー、ブハーリン、スターリンに代表される）を詳細かつ徹底的に研究するべきである。そして本当にこうした研究を行うにはまず、スターリンが自らの勝利を保証するために敵対する別派に無理矢理被せた荒唐無稽な罪名を取り消す必要がある。まずスターリンに陥れられて殺された人々を「復権」し、「名誉回復」する必要がある。

これは私が王実味問題から得た中共指導部に対する第一の希望である。

しかし私はもう一歩下がって、中共が現在のトロツキー派に対する見方を変えないという状況下でも、王実味のために少し言っておきたい。私は「被告」の証人という資格で「王実味事件再調査」を行うかも知れない責任者たちに対して以下の陳述をしておきたい。

私の回憶録の中に次のような部分があった。

「中共統治区内では進んで工作に参加したトロツキー派（たとえば王実味など）は容赦のない闘争にあい、最後には殺された[20]」と。

ここで私はこのもの言いがあまり正確でないことを言っておかなければならない。前述したように王実味は陳其昌や私と長期にわたってかなり親しい関係にあり、思想上トロツキーの何らかの影響（特に文学方面の見解）を受けていたとはいえ、結局王実味は終始一貫中国トロツキー派のいかなる組織にも参加したことはなかったのだ。

王実味はかつてトロツキー派のシンパサイザーであったとは言えるが、トロツキストであったと言うことはできない。

明言して置かねばならぬ第二点は次のようなことだ。王実味は大体一九二九年から一九三四年までの時期、党との関係を失っていたが、組織に改めて参加しようとしたため、当時「中央派」と反対派の間で逡巡していた。しかし王実味は最終的に前者に参加し、後者には参加しなかった。そしてこのことは完全に彼自身の決定であった。王実味は中共組織に改めて参加することを決心してからはトロツキー派の友人たちとの交友を絶った。

ここには「派遣」等という問題はまったく存在しない。「加入戦術」の意図など絶対に問題にならない。

私はこの二つの証言が多少なりとも王実味復権の最後の難関を乗り越える助けとなることを願っている。また王実味の復権が多分まだ健在であろう王実味の妻と娘の境遇改善に資することを願っている[21]。

王実味が延安に赴いたとき、妻劉瑩と娘念芬は同道していなかったのは間違いないはずだ。というのはいかなる文書にも二人の記載を見たことがないからである。当時二人は湖南の実家に戻っていたのであろう。その後、戦争と革命の苦難の歳月の中で、とりわけ「史上例を見ない文化大革命」を、二人はどう過ごしたであろうか。あるいはまったく迫害を受けなかったであろうか。

ただこの母子の無事を願い、また二人が夫と父親の無実の罪が晴れることで、不当な差別から免れることを願うばかりである。

一九八五年　二月十日　完

後記

文章を書き終わり、読み直してみて言わんとするところが言い尽くせていないことに気づいた。この文章の目的のせいなのだが、私はこの旧友のことを事実の方面を重視して書くばかりで、性格と才能の面から紹介することをしなかった。少なくとも極めて不十分だった。私は三十三年前に「潤土」の筆名で香港の『星島晩報』に書いた昔の文章、「『野百合の花』の作者王実味について」をひっくり返してみた。その中の幾段かは本文の不足を補うことができそうなのである。そこでここに摘録して本文の後記とする次第である。

「作家としていうなら、王実味には才気があった。王実味の文章は美しく、話し言葉も生き生きと書かれていた。張天翼とは同級生で二人は気が合い、ついには書いたものがどちらの作かわからなくなるという始末だった」

「ただ彼の生活は苦しく、毎月の生活費が彼の筆にかかっていたので、多くの時間を訳業に費やさざるを得なかった」

「王実味は決して才を鼻にかけ、偉ぶるような人間ではなかった。わざと偉ぶったりしなかったのは言うまでもない。かれは心根が善良で、まっすぐな性格だった。欠点といえば、いささか短気で激しやすいということが言えるかも知れない。意見がちょっとでも合わないとすぐに顔色が真っ青に変わるのであった。友人に対しては、その新旧を問わず、勝手放題だった。胡風と彼とは同級生だったことがある。胡風は名だたる頑固者だったが、王実味に比べれば、この魯迅先生に世故を解しない批評家と賞賛された胡風も極めて円満だったと言っていい」

「一般の友人たちの間では、王実味のこの性格はたいてい歓迎されなかったが、つきあいが長くなると、多くの者は彼のことを理解するようになり、好ましく感じるようになった。というのは王実味は実に愛すべき人物だったからである。だから王実味の友人は多くはなかったが、交流のあった者はみな本音のつきあいだった。しかし、もう少し大きな範囲、政党の同志間では王実味の性格が良しとされるのは難しかった」

「王実味は非常に早く中共に入党した。一九二七年春頃のことであった。彼の入党は思想からというよりもむしろ感情に発するものであった。王実味にとってはいかなる種類の抑圧も耐え難いものであった。政治であれ、経済であれ、思想であれ、既成のもの、旧いものにはほとんどすべて反対だった。もう少し抽象的に言えば、彼の血の中には天賦の反逆の気質があったのだろう。そしてまさしくこの気質のために、彼は最左翼の立場に立つ革命党に入っていったのである。マルクス主義が彼を共産党員にさせたのではない。マルクス主義に関して言えば、彼は読んでいたばかりではなく、何冊か翻訳をしてもいたが、結局精通するまでには至らなか

った。つまり、マルクス主義は彼の魂の深部まで入り込むことはなかったということである。史的唯物論の本をどれだけたくさん読んでも、彼は確固として自己の見解を保ち続けた。「人間性改革論」である。史的唯物論によれば、社会制度が変われば、人間性もそれにしたがって次第に変わっていくのである。しかし、王実味の見解によれば、もし同時に（あるいは先に）人間性を変革しなければ、社会制度も結局うまく改造できないと言うのである。いかに改造するかについては、かれはまず教育、芸術ひいては道徳説教の方面からと言うのだった」

「この「人間性」のせいで、王実味は友人たちと顔を真っ赤にしてどれほど論争したことか。大いに論争したあと、友人たちの多くは彼がでたらめを語っていると考えたが、中には彼に同調してついていく者もいた。しかし、規律が厳しく、思想統一された政党内ではこれは大きな災いを招くこととなっていった。今回の「野百合の花」事件の中で、「人間性論」は王実味の数多い大罪状の一つとされたのであった」

*

「社会科学の思想命題が文学家や芸術家の頭の中に入り込むとき、多くはその相貌を変えざるを得ない。文芸家にはある種の特権があるようで、彼らは自分の方法でそうした思想を表現することができるし、またそうしなければならない。厳格な社会科学者の目から見ると、こうしたやり方は滑稽ででたらめなもの、あるいは幼稚なものに映る。しかしそうした滑稽ででたらめで幼稚な思想方法を放棄し、直接百パーセント社会科学の方法で文学や芸術の創作活動に従事するなら、結果は間違いなく悪いものとなり、その努力は必ず失敗に終わるだろう。まさにそのために真に聡明な革命指導者たちは思想の尺度と芸術の尺度を混同して語ることがなか

ったのである。彼らはある種の文学家や芸術家の偏った見解に対してつねに寛容な態度を採った。かつてマルクスはハイネやフライリヒラートに対して、またレーニンはゴーリキーに対して、ゴーリキー自身は詩人ブロークに対してこうした態度を採った」

「王実味の「人間性論」乃至「自由主義」は、ブロークの「ヒューマニズム」や「反教化主義」に比べれば、ずっとノーマルなものである。ブロークの思想は、その多くはまったく典型的な与太話である。しかしそれらの与太話が「事件」を構成することはなかったのである」

「文芸家の創作意図が刑事事件になるのは、ソ連ではスターリンが大権を独占して以後のことである」

訳注

（1）一九二六年三月一八日、北京で日英米などの不当な干渉を受け入れた北洋軍閥政府に抗議する学生の請願デモに政府側が発砲、多数の死者が出た。

（2）解説の注9の拙稿参照。陳其昌の北京大学時代の党内役職についてもこれを参照のこと。

（3）Rue du Marché とも言う。現蘆湾区順昌路。

（4）杜甫の詩「羌邨三首、其一」の句。戦乱に離別した家族が再会を果たした喜びを歌う。お互い向かい合っているのが夢のようだ、の意。

（5）出典は後記に出てくる香港『星島晩報』掲載の「『野百合の花』の作者王実味について」か？

（6）原文は「家無隔宿糧」、家には一晩留め置く食料もない、の意。『聊斎志異』巻二「侠女」に「無隔宿糧」の語が見える。

（7）解説で触れた馮雪峰の王実味書信への回答はこういう見方を支持するものであろう。

(8) 一九三〇年創刊の『展開』半月刊のことと思われる。
(9) 漕河涇は現徐匯区西南の鎮でかつては龍華区に属した。漕河涇監獄は一九一九年に江蘇第二監獄と改名されているが、旧名が通用していたようだ。
(10) 重慶南京新民報社、一九四四年十一月刊。のち、本書はトロツキスト鄭超麟の孫娘（正確には鄭超麟四弟の孫）鄭暁方の編集で、一九九二年上海書店から文史探索書系の一冊としても刊行されている。なお、本文次節の「蒼ざめた表情の青年……」という引用は同書からのはずだが、丁玲と王実味が登場する上海書店版一四七頁の文章には「蒼ざめた表情の青年……」云々の表現はない。初出あるいは初版等との間には異同があると考えられる。
(11) 旧時の一元銀貨。
(12) 杜甫の詩「李白を夢む、其二」に「冠蓋京華に満つるに、斯の人独り憔悴す」と見える。「いまや都には華やかに時めく人々が満ちているのに、この人だけが独りやつれはてている」の意。目加田誠著『漢詩大系9　杜甫』集英社、一九六五年による。
(13) 本稿初出誌の引用部は「行審」とするがこれは誤植で王凡西の訳者あてテクストでは「行軍」と訂正されている。
(14) このテクストは現在では『建国以来毛沢東文稿』第十巻（中央文献出版社、一九九六年）及び『毛沢東文集』第八巻（中共中央文献研究室編、人民出版社、一九九九年）で見ることができる。ともに、王実味に関する注では名誉回復が行われたことが記されている。日本語では『毛沢東思想万歳（下）』（東京大学近代中国史研究会訳、三一書房、一九七五年）に「拡大工作者会議での講話」として収録されている。
(15) 王実味のこれらの文章は現在では、解説で挙げた『王実味文存』その他で容易に見ることができる。「硬骨と軟骨」は「零感両則」の「二」として収められている短文。
(16) この部分は「野百合の花」「第四節平均主義と等級制度」の引用である。最後の一段、「ややもすれば」以下は、「野百合の花」の「第一節我々に欠けているものは何か?」で紹介される王実味が聞いた延安の女性同志の会話であり、本来この位置に入る言葉ではない。今、宋金寿のテクストが掲載された『党史通訊』一九八四年第八期を見ることが

できないので（慶應義塾大学図書館は当該期を所蔵せず、ＣＮＫＩでもヒットしない）、宋金寿の引用に問題があるのか、王凡西の誤りなのか、断定できない。なお、早稲田大学図書館蔵のマイクロフィルム一九四二年三月十三日及び二三日付『解放日報』「文芸副刊」の初出テクストを見ても現行テクスト（例えば『王実味文存』など）と大きな異同はなく（小さな異同は存在する）、「ややもすれば……」以下はやはり第一節の終わり近くにある。

（17）党風、学風、文風を指す。

（18）一九三二年に蔣介石が国民党内に設立した反共特務工作を担う組織。その中核実行部隊が「藍衣社」。

（19）解説で触れたとおり正しくは斬首刑。

（20）『双山回憶録』、香港周記行出版社版二七八頁、香港士林図書服務社増訂本版三一七頁、北京東方出版社版二五八頁、柘植書房日本語版『中国トロツキスト回想録』二三五頁。

（21）王実味の未亡人劉瑩が王実味の生涯と王実味事件の名誉回復に至る経緯を書いた文章「沈痛的訴説　無限的思念」、及び王実味の娘、王勁楓の文章「我的爸爸王実味」は解説参考文献に掲げた『王実味冤案平反紀実』に収録されている。前者は王凡西、陳其昌との交流についても記しているが、一九九〇年代初めの人民共和国内で書かれ、しかも王実味復権の障害となった人物との交流についての回想であるから、王凡西の語るところとはニュアンスが異なる、微妙な書き方である。王勁楓は年齢からして王凡西が言うところの「念芬」のことであろう（解説注13の朱鴻召著「王実味年譜」によれば、一九三一年生れ）。なお、王実味と劉瑩の間にはもう一人息子王旭楓（一九三五年生れ）がいる。残された彼ら家族の苦難の歴史については解説参考文献に挙げた黄昌勇著『王実味伝』の第十六章「生者与死者」が詳しい。